

—— 推薦文 ——

中央アジア史研究の分水嶺と新しい出発点

京都大学名誉教授 英国学士院客員会員 吉田 豊

京大考古学の水野清一の学生として1960年代アフガニスタンでの発掘で始まった桑山正進先生の研究は、ガンダーラからヒンドークシュの南北の遺跡の発掘の現場に軸足を置きながら、文献史料、とりわけ玄奘を初めとする求法僧の記録類を博搜して、遺跡の年代や歴史地理学的な意義を論じることを特徴としている。文字通り他の追隨を許さない成果をあげてこられたが、パーミアンの仏教遺跡に関する一連の研究はその精髓である。1990年代に入って内戦のアフガニスタンから、大量のバクトリア語文書、ガンダーラ語及び梵語仏典が現れ、出土貨幣も含めてこの地域に関する研究が脚光をあびるようになると、英語でも発信して来られた先生の研究は世界的に注目されることとなった。この地の歴史や商路についての先生の考え方の有効性が新出資料から確認されたのである。その意味で先生の研究はそれ以前と一線を画す分水嶺であり、現在の研究の確固たる出発点として必読の論考になっている。ただ惜しむらくはいろいろな雑誌や論文集に発表されていて、入手が難しいものもある。このたび欧文も含め先生のこれらの論考が、一括して刊行されることは、日本のみならず世界の学界にとって福音である。

国内外の研究者待望の論集

京都大学人文科学研究所長・教授 稲葉 穰

仏教考古学者、中央アジア・南アジア古代史家としての桑山正進先生の命名は、日本よりむしろ海外に鳴り響いていると言ってよい。古代～中世の中央アジア、北インドの歴史・考古・美術を学ぶ研究者で桑山先生の論文を読んだことがない、という人にはあまり会ったことがない。豊富な発掘調査経験と、人文研東分部という環境の中で蓄えられた幅広い漢籍に関する知見を兼ね備えた研究者は空前の存在だからだろう。先生が人文研を定年退職される際に刊行された英文論集 *Across the Hindukush of the First Millennium* は、非売品だったせいもあり、世界中の研究者から、どうすれば入手できるのかという問い合わせが後を絶たなかった。このたび、半世紀以上におよぶ桑山先生のお仕事が一冊にまとめられ、かつ update された上記英文版もあわせて刊行されるのは、それゆえ国内外の研究者にとってこの上ない朗報である。ただ、できれば専門家以外の方にも読んでいただきたいと願う。優れた歴史家というのがどのような方法で過去と向き合い、歴史を描き出してきたのか、その見事な実例がここにあるからだ。

2022年8月刊行開始 4ヶ月毎配本予定



- B5判・上製・クロス装・函入・平均450頁
- 各巻本体予価 16,500円 (15,000円+税)
- ISBN978-4-653-04590-8 (セット)

ヒンドークシュ山脈南北地方、そこは大文明の地ではない。しかし、ここを押さえる政治勢力は、中央アジアばかりか東アジアまで及び、歴史の経過は大きく影響を被った。この地域は、アジアの歴史の鍵鎖である——考古学調査と文献精読の成果(すべて未単行の論考)を結集し、全4巻に編む。

初回配本第I巻は、「異相ガンダーラの仏教」。ガンダーラに関する21本の論考を収録。付索引。

第1回配本  
第I巻

異相ガンダーラの仏教

第I巻 16,500円 (15,000円+税)

株式会社 臨川書店

〒606-8204 京都市左京区田中下柳町8番地 ☎075-721-7111 FAX075(781)6168  
E-mail kyoto@rinsen.com URL http://www.rinsen.com

臨川書店

桑山正進 著

ヒンドークシュ南北歴史考古学叢攷

全4巻

## 第I巻 異相ガンダーラの仏教

ISBN978-4-653-04591-5

この叢書の公刊に

### I ガンダーラをどうとらえるか

シャカムニの表象を通して視る——南アジア亜大陸北西地方の歴史考古学研究
ガンダーラとその仏教

### II 仏寺の外相

タキシラ=ガンダーラの仏教寺院/タキシラ仏寺の伽藍構成
仏像出現ごろのタキシラ 層位と編年/ハッダ最近の発掘に関する問題

### III ガンダーラにおけるストゥーパ概念の転換

ストゥーパ方形基台の由来/シャー=ジー=キー=デー=主塔の遷変
アウグストゥス霊廟と大ストゥーパ——車輪状構造の由来
触地印の坐仏を容れたストゥーパ

### IV 漢文資料にあらわれたガンダーラ仏教

罽賓と仏鉢/ナレンドラヤジャスと破仏/ウディヤーナ札記

### V ガンダーラから中央アジアへ

ガンダーラからクチャへ/ガンダーラの土器
ガンダーラにみられる土偶の年代

### VI 大月氏からクシャーンへ

貴霜丘就却の没年/トハリスターンのエフタル、テュルクとその城邑
トハラの境域、藍市城と活国都城/バーミヤーンとガンダーラ



## 第III巻 玄奘三蔵の形而下

ISBN978-4-653-04593-9

### I 玄奘の形而下

玄奘の形而下/大唐余録——西域記慈恩伝読後/大唐西域記と求法の背景
インドへの道——玄奘とプラバ=カラミラ/玄奘の旅の環境
大唐西域記はなぜ書かれたか/大唐西域記は別にあった
なぜ玄奘はナーランダーへ行ったのか/慧超伝の中天竺王

### II 北魏隋唐のサーサーン系文化

法隆寺四騎獅子狩文錦の制作年代/1956年来出土の唐代金銀器とその編年
唐代金銀器始原/東方におけるサーサーン式銀貨の再検討
サーサーン冠飾の北魏流入

### 付録1

インダス文明の都市と構造/インダス文明に関する最近の理解
インダス文明のありかた/パルーチスターン考古記/バヌー考古記

### 付録2

中央アジア考古学の発達/考古学調査から見たアフガニスタン
中央アジア、南アジアの発掘現状

## 第II巻 新興バーミヤーンの時代

ISBN978-4-653-04592-2

柱礎と壺とヒンドゥークシュ

### I バーミヤーンの出現

バーミヤーン大仏の出現/バーミヤーン大仏成立にかかわるふたつの道
バーミヤーンに関する漢文資料/バーミヤーンの城塞遺跡

### II カーブル、ザールルの登場

迦畢試国の編年史料/葱嶺山と阿路孫山/馨孛、順達、刹利、曷犍支
6–8世紀Kāpiśi-Kabul-Zābulk 貨幣と発行者

### III タバ=スカンダルとカピーシー国の遺跡

タバ=スカンダル第1回発掘調査概報/7世紀におけるベグラームの存立
ヒンドゥークシュ南麓における歴史の空白

### IV カピーシーの仏教とヒンドゥー教

大理石ヒンドゥー神像はヒンドゥー王朝のものか
ガネー=シャク神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年

### V トハリスターンの発掘

チャカラクテベ遺跡第3次発掘

### 付録1

アフガン陶房誌1977/乾燥アジアにおける煉瓦

## 第IV巻 英文篇

ISBN978-4-653-04594-6

## Across the Hindukush of the First Millennium, I Across the Hindukush of the First Millennium, II Kāpiśi and Gandhāra according to Chinese Buddhist sources How Xuanzang Learned about Nālandā Historical Notes on Kāpiśi and Kābul in the Sixth-Eighth Centuries Chinese Records on Bamiyan: Translation and Commentary Pilgrimage Route Changes and the Decline Gandhara Swat, Udyana, and Gandhara: Some Aspects Related to Chinese Accounts Kanjūr Ashlar and Diaper Masonry: Two Building Phases in Taxila of the First Century A.D.

The Stupa in Gandhara

Between Begram II and III: A Blank Period in the History of Kāpiśi

Tangible Ties with Śākyamuni in Gandhāra

The Mofa 末法 or the End-period of the Dharma: An Echo of the Hephtha lite Destruction of Gandharan Buddhism?

The Main Stūpa of Shāh-ji-kī Dheri: A Chronological Outlook

\*Across the Hindukush of the First Millennium, I は、2002年刊行書籍(非売品)の再録。

## 桑山正進(くわやま・しょうじん)

1938年東京東京市(現港区)生まれ。京都大学文学部考古学科卒。同大学院博士課程満期退学。同大学博士(文学)。専門は東洋史学・考古学。京都大学人文科学研究所教授、99年所長。2002年定年退官、名誉教授。主な著作に『カーピシー=ガンダーラ史研究』(京都大学人文科学研究所1990)、『慧超往五天竺国伝研究』(編著、京都大学人文科学研究所1992、臨川書店1998)などがある。

組方見本 第I巻、第IV巻より(版面実寸の約20%)



でつくられたものと考えられる。北西部のように大塔に直接対する縦並列とされた副塔群の配置は、むしろ考えられ、しかも外側にある縦並列の塔堂と大塔を連続させる。このようにも縦並列は考えられるものではな、ジュー=大塔のように対塔単位の仏塔の配置に、仏塔と一つの塔群を併せて、仏がら副塔までくち副塔の建築物構成は、ポンデラのクマール=ゴウ=ハツツのクマール=大塔の配置である。そのほかに大塔から離れた場所に多くの副塔が、それらは大塔と順に建てられた塔群の中に、するわら大塔外側に仏塔は並に並べている。塔に順に塔の配置の分が1基ある。これははみな副塔群を並べて配置であるが、これは正確にクマール=ゴウ=ハツツの塔群と副塔群は順に配置される(“spiral tower”)と記述されている。このようにも配置されるが、縦並列は、建築物をとりかち副塔や対塔群の

<sup>[</sup>\* Dates of Arrival in China. "Dates of Departure from China. Dharmapala's date given by Hsu Yun, 1959, pp.116-118 is not the date of the departure. Dharmapala's date and names are difficult to recommend. See Wright, A. A., Journal of Asian Studies, 11: 4, 1952, p. 151 and Hsu, F., 1952, p. 194 and Hsu, 1952, p. 192, p. 193.
<sup>]</sup>
<sup>[</sup>The Hsiangshih, Hsi-fan, tells us that in 316-318 Dharmapala was shipped the Buddha's alms bowl during his stay of a year or more and at last he got a copy of the Sogdian text of the Avakīrīkāvastī. In this passage the alms bowl would be highly adequate for the identification of 316-318, if it be taken into consideration that 316-318 actually was a 100-year period and even Xuanzang, 257, about two centuries later, recorded in still retaining plants which had once supported the bowl." 316 is well known as the Chinese dissemination of some area in the north of the Pamir, although having been subjected to change the actual location as the informations regarding it may have increased in China. Hence the historical-geographical problems of 316 has been argued since the last century. "I do not see it seems to have generally been accepted that 316 be called by Chinese during the 3rd Chinese period should be no other than Kanabul, or Sogdian 316 or 317. New studies by French has even consolidated this identification. "such views however, may be improved with the above evidence for the location of the bowl." I have been synchronous with Gandhāra at least for Chinese Buddhists.
<sup>]</sup>
<sup>[</sup>In this connection our attention should be directed to 316 and 316-318 themselves, which were on the routes followed by pilgrims. During the latter half of the 6th century and the early 7th century 316-318 was the first and last destination for the Chinese monks, who intended to reach India. It would not be too much to say that they had not found their objects of pilgrimage anywhere in India except 316-318 and the Buddha's tomb in modern Bihar and avonon. Gandhāra, or 316-318, designated at least in the Chinese
<sup>]</sup>
<sup>[</sup>
<sup>]</sup>

・各巻収録内容は変更の可能性があります。
・図 表紙：タバ=スカンダル遺跡出土大理石ウマー=マヘーシュヴァラ像(京都大学中央アジア学術調査隊)
　　中面：バーミヤーン大仏実測図(京都大学人文科学研究所蔵)